

ナサニエル・ホーソン作 「ロジャー・マルヴィンの埋葬」の一解釈

清水 武 雄

群馬大学教育学部英語・英米文学研究室
(1989年5月31日受理)

Another Interpretation on “Roger Malvin’s Burial” by Nathaniel Hawthorne

Takeo SHIMIZU

*Department of English, Faculty of Education, Gunma University
Maebashi, Gunma 371, Japan
(Accepted May 31, 1989)*

(一)

十九世紀アメリカのロマンス作家ナサニエル・ホーソン Nathaniel Hawthorne (1804—64) には、あのチャールズ一世(在位1625—49)治下の英国を離れてマサチューセッツ湾に渡来(1630)したピューリタンのウィリアム・ホーソン William Hathorne (1607—81) と、その息子ジョン・ホーソン John Hathorne (1641—1717) という、二人の名立たる先祖がいた。前者はマサチューセッツ湾植民地に於て初代総督ウインスロップ(1588—1649)に次ぐ重要人物である¹⁾と共にクウェーカー教徒の断圧で、また後者は判事在任中に於けるセイレムの「魔女狩り」(1692)で、それぞれアメリカ史にその名を留めている²⁾。非難さるべき両者の社会的行為に弁護し得る外面的状況³⁾はあったものの、生来、ことのほか纏綿なる情緒の持主であったナサニエルには、自らがそうした汚辱の血を受け継いでいることへの痛恨の情と、天与の分際を逸脱しがちな現身の儂さへの感懐が、あたかも絢交ぜの紐となって彼の内面を縛り続けていたようである。ナサニエル・ホーソンは、『緋文字』*The Scarlet Letter*⁴⁾の序章「税関」*The Custom - House : Introductory to “The Scarlet Letter”*’の中で、この二人の人物について次のように述べている。

[William] was a soldier, legislator, judge ; he was a ruler in the Church ; he had all the Puritanic traits, both good and evil. He was likewise a bitter persecutor ; as witness the Quakers, who have remembered him in their histories, and relate an incident of his hard severity towards a woman of their sect, which will last longer, it is to be feared, than any record of his better deeds, although these were many. His son, too, inherited the persecuting spirit, and made himself so conspicuous in the martyrdom of the witches, that their blood may fairly be said to have left a stain upon him. So deep a stain, indeed, that his old dry bones, in the Charter Street burialground, must still retain

it, if they have not crumbled utterly to dust! I know not whether these ancestors of mine bethought themselves to repent, and ask pardon of Heaven for their cruelties ; or whether they are now groaning under the heavy consequences of them, in another state of being. At all events, I, the present writer, as their representative, hereby take shame upon myself for their sakes, and pray that any curse incurred by them—as I have heard, and as the dreary and unprosperous condition of the race, for many a long year back, would argue to exist—may be now and henceforth removed. (pp.9-10.)

ホーソーンの作品には主人公らの〈運命凋落〉と〈血胤断絶〉の筋立てが目白押しである。このことは、作者自身のあの呪われた血・家系への断絶願望と無縁でなく、彼の作品は、そうした衝動の昇華ではなかったかと私には思われる。

たとえば、「死者の妻たち」(“The Wives of the Dead,” 1832)では、同じ屋根の下に住む新婚の二人の妻が、兄弟である夫の訃報に続けて接し、それぞれ悲嘆に暮れているところへ入れ替わりに夫の無事の知らせを受けるが、それは夢だったかも知れない。「大望に憑かれた過客」(“The Ambitious Guest,” 1835)では、野心を抱いた若者が山奥の一家に宿泊したことから、純朴な小世界が一変し、山崩れによって全員が押し流されてしまう。「結婚式に吊いの鐘」(“The Wedding Knell,” 1835)では、死装束を着けた白髪の花婿と老女の花嫁が、永遠の結びつきを信じて、吊いの鐘の鳴る中で結婚式を挙げる。「牧師の黒いヴェール」(“The Minister’s Black Veil,” 1836)では、罪びとであることを忘却して生きる者たちを悔悟させる象徴として、自らの顔面に黒縮緬の覆いを着け説教する牧師が、周囲の説得や婚約者の懇請を撥ねつけ、結局、墓穴の中まで頑なに陰を携えてゆく。「堅硬石の男」(“The Man of Adamant,” 1837)では、説教師が自らの救済のみを求めて森の奥の岩穴に立てこもり、石と化してしまう。「あざ」(“The Birth - mark,” 1843)では、科学者がその新妻の頬に小さな痣のあるのに耐えられず、苦心の末、自ら合成した薬品でそれを除去するものの、同時に美しい妻は死ぬ。「美の芸術家」(“The Artist of the Beautiful,” 1844)では、機械仕掛けの美蝶製作に執念を燃やす青年が、周囲の嘲弄にもめげず、ついに念願を達成するが、その芸術家の「観念(理想)」と「物質(現実)」の所産、言うなれば彼の「子供」も、かつて思いを寄せ、今は人妻となった女の子の手によって敢えなく握り潰されてしまう。「ドラウンの木像」(“Drowne’s Wooden Image,” 1844)では、木彫師がモデルの美女を恋慕しつつ畢生の作を完成するが、女が帰国してしまうと、以後、ただの木彫師となり、独身のまま生涯を閉じる。「ラパチャーニの娘」(“Rappaccini’s Daughter,” 1844)では、毒草を栽培研究する医学者が、一人娘の幸福を願うあまり、実験を通じて毒性に強い人間へと育て上げるものの、娘は庭に侵入してきた若い医学生と恋仲となり、結局は、自分を「栽培」した父を呪いつつ、若者の持参した解毒剤を「服毒」して死んでしまう。「人面の摩崖」(“The Great Stone Face,” 1850)では、山の岩壁が人面をなし、いずれ村にその顔と爪二つの英雄が現われるとの伝説があって、主人公は幼少時からその到来を待ち侘びているが、最後には彼自身がその人物と目されるに至るものの、彼には妻も子もないようである。「イーサン・ブランド」(“Ethan Brand,” 1851)では、石灰焼の

男が「赦されざる罪」の在処を求めて旅に出るが、長年探し求めたそれが実は己の胸にあることを知り、石灰窯に身を投じてしまう。

以上のように、ホーソーンの文学世界では、時に分際を忘れ、妄想に憑かれたがために最愛の者がもともと与えられぬか、与えられても喪失してしまうことによって、最後にはこの世から切断されてしまう人間たちの運命が繰り返し描かれている。

(二)

扱て、ホーソーンの初期の作品である「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(“Roger Malvin's Burial,” 1831) もく運命凋落)及びく血胤断絶)の物語である。韜晦を文学技法の一つと捉えたこのロマンス作家の作品には、必然的に種々の解釈が生起するが、彼二十代前半の作と推定し得る⁵⁾この「ロジャー・マルヴィンの埋葬」でも既にそのことは顕著である。従来、喧しく論議されてきた問題として

- (1) ルーベンがロジャーを置き去りにした行為は是か非か
- (2) ルーベンが妻のドーカスにさえ隠匿しなければならなかった「罪」の意識はどこに由来するか
- (3) 息子サイラスの射殺は偶然の事故か故意による殺害か、また射殺によってなされた「贖罪」とは何か

拙論の構成上、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」の梗概をやや詳しく記しておかねばならない。この作品には、「ラヴェルの戦い」(1725)後、郷里へ帰還する途中の少数兵士の状況をモチーフとしている旨の短い序が付いている。深傷を負った二人の兵士が森の中で目覚める。己の死期の近づいたのを悟った初老のロジャー・マルヴィンが娘ドーカスの婚約者であるルーベン・ボーンに、自分を置いて先を急ぐように懇請する。若いルーベンは、内心、せめて自分だけは助かりたいという第一の保身と、帰還後の体面上、「義父」を見殺しには出来ぬという第二の保身との狭間で煩悶する。そして結局は相手の懇請をやむを得ず受け入れる形で、また必ずや遺骨の埋葬に戻って来るとの誓約をした上で、ひとり先を急ぐことにするが、出発直前、彼はロジャーが自らの墓碑と定めた岩の近くに生える若木の天辺の枝に己の血染めの包帯を結び、それを誓約の証とする。「父」であり戦友である瀕死のロジャーを後にして一人行くルーベンは、やがて森の中で力尽き昏倒するが、救出部隊に発見され、故郷へと運ばれる。ドーカスの手厚い看病の結果、数日後、意識を回復した彼は、父の安否を気遣う彼女に真相を明かし倦ねているうち、結局は重傷の身ながらロジャー・マルヴィンの埋葬を済ませて帰還した忠義な男ということにされてしまう。ドーカスの手によって肉体の傷は癒えたものの、彼の心の傷は激しく疼き出す。今さら埋葬班を依頼する訳にはゆかず、さりとて荒野に対する迷信的恐怖のために一人で出かける勇氣もない。あの胸を噛む賞讃の中でドーカスと結婚した後、ルーベンは罪の亡霊から陰鬱な人間となり、開拓地で種々の悶着を起こす。そして十八年後、ロジャーの遺産を損耗した彼は森の奥深くに新天地を求

めるほかなくなってしまう。ルーベンとドーカスには十六歳になろうかという一人息子のサイラスがおり、この少年は容姿や狩猟の腕前から、いずれ辺境の指導者になるものと周囲から瞩目されていた。ルーベンは己の面影を宿すこの息子を妻のドーカス以上に愛し、誇りとしている。愈々、一家は森の奥へと出発するが、何故かルーベンの足取りは予定の道筋から外れがちとなる。そして五日目、ルーベンの心に、ロジャーを置き去りにした場所の記憶が甦る。彼は天意が贖罪の機会を与えようとしているのだと感じる。一足先に食糧となる獲物を探しに行ったサイラスに続いて彼も露営地を後にするが、茂みの中に物音を聞きつけたルーベンは本能的に発砲する。だが、彼が射止めたのは鹿ではなかった。彼は、その場に岩があって、近くの木の花の枝に布が結ばれているのを認める。息子が鹿を射止めたと思って近づいて来たドーカスに、ルーベンはその岩が近親者の墓であることを告げ、「君の涙はお父さんと息子の上に同時に落ちることだろう」と語る。夫の足元にサイラスが死んでいるのを見た彼女は息子の側に倒れる。すると、例の血染めの包帯を結んだ枝が三人の上に、そしてロジャー・マルヴィンの遺骨の上に砕け落ちてくる。この時、初めてルーベン・ボーンの中から祈りの言葉が天上へと昇る。それは五月十二日のことであった⁶⁾。

扱って、前記の(1)であるが、若者が己の未来の生に執着し、瀕死の老人と共倒れするのを避けようと願うのは自然の情であり、これを以て非難するのは酷と言えよう。それにまた、ルーベンはロジャーの「自己犠牲」に対し自らも「自己犠牲」で対応するが、それでもロジャーが最後の力を振り絞って、1. 'You are young, and life is dear to you. Your last moments will need comfort far more than mine.' (p. 340) 2. 'And tell her, that you will be something dearer than a father, ……' (p. 341) 3. '…and parties will be out to succour those in like condition with ourselves. Should you meet one of these, and guide them hither, who can tell but that I may sit by my own fireside again?' (p. 342) と言い含めてもいることから、ルーベンがロジャーを荒野に置いて行く行為は容認されるべきであろう。この件についてルーベンの犯罪性を主張する向き⁷⁾もあるが、非とするに当たらないとの見解が圧倒的である⁸⁾。

だが、ここでルーベンの行為の正当性をいくら主張しても作品の解釈は進展しない。確かに、外面的状況からすれば許容されなければならぬが、問題はルーベン自身が自らの行為に罪深いものを感じ取っている点にある。彼の内面に行為が落とした影は何か。そこで問題は(2)に移る。はたして、あの時、ルーベンが単独行でなく、ロジャーを激励し、身を支えて同行していた場合、二人とも救出される可能性は全くなかったのであろうか。ルーベンの苦悩の中核には、「もし自分が踏みとどまってロジャーを援けながら逃避行を続けていたならば、あるいは二人とも救われたのではないか、という疑問が含まれていたはずである⁹⁾」との指摘は重要である。ルーベンは出陣前ドーカスに「命の限り君のお父さんの命は守ってみせる」'… the fate of her father, whose life I vowed to defend with my own.' (p. 341) と誓約しておきながら見殺しにしてしまった訳だが、もし同行していれば二者生還のポシビリティはあった。ロジャー自身、初め、「わしの命は二日と

もつまい」‘There is not two day's life in me, Reuben.’ (p. 339) と言っておきながら、後で「多分、わしはこの世に残された時間について思い違いをしているのかも知れん。直ちに援けが駆けつければ、あるいはこの傷とて治らぬとも限らぬ」‘Perhaps I deceive myself in regard to the time I have to live,’ he resumed. ‘It may be, that, with speedy assistance, I might recover of my wound.’ (p. 341) と言い直している。斯くして救出される可能性のあったロジャーを見殺しにしたルーベンの胸は、「己が人殺しではないかとの思い」[‘… he at times almost imagined himself a murderer. (p. 349)] に責め苛まれるようになる。いかに相手の懇請に従ったとは言え、二重の自己保身に端を発する外面的な取り繕いであれば、結局はその者の内面に罪の亡霊を招かざるを得ない。ドーカスとの誓約を死守できなかったルーベンの心に更に罪深い影を落としたものは、大方の知見通り、血染めの包帯を証としたあの誓約（これは単にロジャーに対するばかりでなく、ルーベン自らに対する誓約でもあった）の不履行がある。本質的には利己的動機によって単独生還したルーベンが、他者の埋葬のために単独で荒野に赴くことは自らの死に単独で直面することになり、恐くてそれは出来ない。ルーベンはこうした第三の自己保身によって更に誓約を破ってしまう。その都度、自己保身を優先させることによって、再三、誓約を破ったルーベンは、妻のドーカスにも真実を隠し通すことによって、ひとり罪の意識に煩悶するのである。

次に(3)であるが、いわば離人症の度合を深めてゆくルーベンは、ついに開拓地での生活も破綻し、妻子を連れて未開の森の奥へ赴くほかなくなる。彼は、己のかつての姿を息子のサイラスに投影することによって、辛うじて現実世界に生きる便¹⁰⁾としてきたが、1. ルーベンの〈若い命〉であり、2. 〈ドーカスの心を支える命〉であり、3. 〈ロジャーの血を継ぐ命〉でもあるサイラスを、彼は見覚えのある岩の近くで射殺する運命となる。このルーベンによるサイラス射殺が偶然によるものか故意によるものかは見解の分かれるところ¹¹⁾であるが、「獣ですら断末魔の苦しみを表わせる低い呻き声の一つ」[A low moan, … by which even animals can express their dying agony (p. 356)] 上がったとあり、さらにルーベンが「足もとの何かに茫然と見入っていた」[he was apparently absorbed in the contemplation of some object at his feet. (p. 359)] とあるので、私は単純に誤殺と取りたい。だが、問題は、息子を殺すことによって何故に「ルーベンの罪は贖われた」[His sin was expiated, … (p. 360)] ことになるのかでなければならない。これについては、たとえばサイラス (cyrus-cross) をキリスト (christ) と見立て、犠牲に供することによってルーベンが救済されるとする Waggoner¹²⁾の見解、フロイト心理学の観点から「父」殺し（「権威」の破壊）に根差す罪意識を自己の象徴であるサイラスを殺害することによって解消したとする Crews¹³⁾の見解などがある。

サイラス射殺の場面で「熟練した射手」[a practised marksman (P. 356)] のルーベンが、藪の中に物音がしたからといって直ちに発砲したとの描写には首肯しかねる感もあるが、これは文脈上やはり「超自然の力」[a supernatural power (p. 356)] のなせる業と解すべきであろう。だとすれば、ルーベンのサイラス射殺は天罰であり、結果的にはサイラスの「血」でロジャー・マ

ルヴィンの埋葬を施したことになるが故に、作者が「彼の罪は贖われた」とした部分は作者の客観描写とするよりは、飽くまでもルーベンによる自己本位の解釈を描出話法で表わしたと解すべきであろう。偶然であり必然であるこのサイラス射殺を、作者は「ロジャー・マルヴィンの埋葬」に用立て、なおかつルーベンの飽くことなき自己保身を作為的に客観化に近づける手法で、ルーベンの限りない罪深さを強調したものと思われる。大事な息子を殺してしまった後ですら、ルーベンは妻のドーカスに真実を告白せず、徒らに「ドーカス、大きなこの岩が君の近親者の墓石なのだ」‘This broad rock is the grave - stone of your near kindred, Dorcas,’ (p. 360)「君の涙はお父さんと息子の上に同時に落ちることだろう」‘Your tears will fall at once over your father and your son.’ (p. 360) とのみ述べて、徹底して迂言を企てようとしているが、こうしたルーベンの因業さに天は怒り、「虹」ならぬ誓約の印の碎片を彼の上に雨と降り注ぐのである。そして、「祈りの言葉が、それこそ長い年月の末に、初めてルーベン・ボーンの口から天上へと昇っていった」[a prayer, the first for years, went up to Heaven from the lips of Reuben Bourne. (p. 360)]とあるが、ルーベンからすれば「祈り」であったにしても、天は彼の「息」を召し上げたことになろう。

財を失い、故郷を失い、そしてサイラスから若くて尊い命を、ドーカスから誇るべき父と子を、ロジャーから彼の血を引く子孫を失わせることによって、ルーベンは無に包囲された生ける屍と化した。自己保身によって現世を彷徨した Reuben¹⁴⁾に対し、それは怒れる神が与え給うた「到達点」(Bourne)なのであった。

(三)

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」最後の場面で、胴枯れ病に罹った枝が崩壊 [the withered topmost bough of the oak loosened itself (p. 360)] するの図は、作者が一個の家系 (a family tree の a bough) 断絶を象徴的に描いているものであり、この作品は文字通り〈運命凋落〉〈血胤断絶〉の物語りである。

ナサニエル・ホーソーンは先祖の犯した罪にこだわり続けた作家であるが、(一)で引用した「税関」の一節のすぐ後で、彼はさらに次のように自嘲してもいる。

Doubtless, however, either of these stern and black-browed Puritans would have thought it quite a sufficient retribution for his sins, that, after so long a lapse of years, the old trunk of the family tree, with so much venerable moss upon it, should have borne, as its topmost bough, an idler like myself. (p.10)

こうして、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」執筆時から四半世紀を経ている『緋文字』(1850)の序章に於ても、節々に類似語句を撒き散らしながら先祖の罪を書き綴っていることから、家系に刻印された汚点が強迫観念となって彼の意識の中枢を占めていたことは明白である。彼は作家として〈運命凋落〉〈血胤断絶〉の物語を吐き出し続けることによって、辛うじて生の均衡を保つ

ことの出来た悲劇の人であったように思われる。

注

- 1) Frank Preston Stearns, *The Life and Genius of Nathaniel Hawthorne* (Philadelphia & London : J. B. Lippincott Company, 1906), p.21.
- 2) William Hathorne arrived from England to Massachusetts Bay in 1630, later settled in Salem, became speaker in the House of Delegates, major in the Salem Militia, defied Charles II, and became a bitter persecutor of Quakers. His son, John, is remembered for his infamous role as the unrepentant magistrate of the Salem witch trials. These were the ancestors who fired Hawthorne's imagination, his pride, and his shame, and ……

—Agnes McNeill Donohue, *Hawthorne : Calvin's Ironic Stepchild* (Kent, Ohio : The Kent State University Press, 1985), p. 7.

It is said that one of the convicted witches cursed Judge Hathorne, —himself and his descendants forever ; but it is more than likely that they all cursed him bitterly enough, and this curse took effect in a very natural and direct manner. Every extravagant political or social movement is followed by a corresponding reaction, even if the movement be on the whole a salutary one, and retribution is sure to fall in one shape or another on the leaders of it. After this time the Hathornes ceased to be conspicuous in Salem affairs. The family was not in favor, and the avenues of prosperity were closed to them, as commonly happens in such cases. Neither does the family appear to have multiplied and extended itself like most of the old New England families, who can now count from a dozen to twenty branches in various places…… The name has wholly disappeared from among Salem families, and thus in a manner has the witch's curse been fulfilled.

—Frank Preston Stearns, *The Life and Genius of Nathaniel Hawthorne* (Philadelphia & London : J. B. Lippincott Company, 1906), pp. 27-28.

- 3) However strong a Puritan he may have been, William Hathorne evidently had no intention of becoming a martyr to the cause of colonial independence. Yet it may be stated in his favor, and in that of the colonists generally, that the fault was not wholly on one side, for the Quakers evidently sought persecution, and would have it, cost what it might. Much the same may be affirmed of his son John, who had the singular misfortune to be judge in Salem at the time of the witchcraft epidemic. The belief in witchcraft has always had its stronghold among the fogs and gloomy fiords of the North …… Judge Hathorne appears to have been at the top of affairs at Salem in his time, and it is more than probable that another in his place would have found himself obliged to act as he did. —Frank Preston Stearns, pp. 22-23.
- 4) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter, Centenary Edition I*, Columbus, Ohio : Ohio State University Press, 1962)
- 5) 小山敏三郎編注 *Selected Tales of Nathaniel Hawthorne・I* (東京：南雲堂, 1984, 第7刷), p. 219. なお、同頁に「ラヴェルの戦い」について詳しい注が付いている。辺境開拓民がインディアンとの間に展開した壮烈なこの戦闘は、1725年5月9日のことであった。
- 6) 戦場からの帰途、ルーベンが荒野の岩の下に *Roger Malvin* を置き去りにしたのは、戦闘から三日後の五月十二日であった。この時間的設定は事件の歴史的背景から見て確かに妥当性を帯び、議論を差し挿む訳ではないが、ただ、一人生還したルーベンが罪の意識に苛まれ、開拓地での生活もままならず、結局、荒野へと向かい、超自然の力に導かれて岩に辿り着く図が、ちょうど *Calvin* の強い影響の下で英国のプロテスタントが、迫害の中、故郷に後にし、偶然の力(風・潮流)の下にプリマスの岩(Rock)に辿り着くあの歴史的事件(1620)と二重写しに見えてならない。分離派102名を運び、彼らが上陸に先立って「誓約」を結んだとされる小帆船 *Mayflower* は「サンザシ」の意であり、そして Hawthorne も「サンザシ」であるが、作者が「ロジャー・マルヴィンの埋葬」のモチーフを「五月」にあった「ラヴェルの戦い」に設定している裏には更に深遠な企図があったのではないかと思いたくなる。分際を逸脱し、神の逆鱗に触

れる人間たちの〈運命凋落〉〈血胤断絶〉というホーソー一流のテーマと彼自身の呪われた家系への強迫観念との関連から、上記の問題をいずれ検討してみたいと考えている。

- 7) Mark Van Doren, *Nathaniel Hawthorne: A Critical Biography* (New York: The Viking Press, 1949), p. 80.
 - 8) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1955. Revised 1963), p. 93. Harry Levin, *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe, Melville* (New York: Knopf, 1958), p. 53. Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: An Introduction and Interpretation* (New York: Barnes and Noble, 1961), p. 31. Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* (New York: Oxford University Press, 1966), p. 82. Robert Cantwell, *Nathaniel Hawthorne: The American Years* (New York: Rinehart, 1971), pp. 124-25. Michael J. Colacurcio, *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales* (Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press, 1984), p. 108.
 - 9) 岩田強「船晦としての技法——ホーソー『ロジャー・マルヴィンの埋葬』論」和歌山大学教育学部紀要「人文科学」第27集, 1978, p. 45.
 - 10) このことは、サイラスを偶像視する罪、ひいてはルーベンが自己を偶像崇拜する罪をも暗示する。
 - 11) たとえば、「偶然である」とする意見に Mark Van Doren [*Nathaniel Hawthorne: A Critical Biography*, p. 81.] が、また、「偶然でない」とする意見に Frederick C. Crews [*The Sins of the Fathers*, p. 88] や Gloria C. Erlich [*Family Themes and Hawthorne's Fiction: The Tenacious Web* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1984), p. 88.] がある。
 - 12) *Hawthorne: A Critical Study*, pp. 90-98.
 - 13) *The Sins of the Fathers*, p. 88.
 - 14) Reuben, in Hebrew, means 'Behold a son!'; Dorcas, in Greek, means 'gazelle'; Cyrus, the mighty Persian king, was viewed by Isaiah as God's appointed agent (Chapters 40-8). —A. Robert Lee, *Nathaniel Hawthorne: New Critical Essays* (London, England and Totowa, New Jersey: Vision and Barnes & Noble, 1982) 所収の 'Towards Romance: The Case of "Roger Malvin's Burial"' (by Harold Beaver) pp. 31-47. の Notes (p. 47)
- ★ 拙論で引用した 'Roger Malvin's Burial' のテキストは *Mosses from an Old Manse, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, Volume X* (Columbus, Ohio: Ohio State University Press, 1974) 所収のものに依拠し、本文中に頁を明示した。

なお、この作品の翻訳は、やはりホーソーの「ドラウンの木像」「堅硬石の男」「雪少女」「胸の蛇」「死者の妻たち」、E・A・ポーの「樽詰めのアモンティリヤード」、H・ジェームズの「時の色合い」、S・クレインの「灰色の袖口」「筏——しぶしぶ海の冒険者」、O・ヘンリーの「シスコ・キッド——紳士の手口」、R・ラーダーナーの「聖しこの夜」と共に、それぞれ解説等を付して、本年十二月に榊ニューカレント・インターナショナルより出版の予定である。